1470号(夕焼け通信 創刊1993.4.23)　2024.11.25
〒690-0823島根県松江市西川津町4276-B402　gosuitei.sakura.ne.jp/yuyake/　編集 宮森健次

老い老いに

木幡智恵美

13

夕焼け通信一年目に何らかの形で文章を載せたのは六名、二年目は十一名。三年目は百号記念に寄稿いただいた方を除いて十二名の文章が掲載された。前号では国際色も出て来たと書いたが、この十二名の中には、彫刻家、陶芸家も含まれている。「羅漢を彫る」を連載された大田出身の彫刻家。その方は、円空上人、木喰上人に心酔し、上人たちが造仏した北海道の地にご自身移り住んで活動しておられる。編集長の依頼を受け、夕焼け通信のロゴマークを考案して下さった。「窯場随想」を書かれた方は九州出身で、大田で窯を開いておられる陶芸家。奥さんと二人で大田の山間の地に窯を築かれた。その当時幾度かお邪魔したことがある。一軒家で周りには畑や果樹園があり、出された器はすべて手作り。何と心豊かな暮らしの空間だろうと羨ましく思ったものだ。

国際色も、芸術色も出て来た三年目の夕焼け通信に私は何を書いたかというと、まずは「続ギイチ君の虫遍歴」。春から秋にかけては虫、冬になると毎年変わるマイブームにのめり込むギイチ君の尽きないエピソードを綴った。途中、二人の息子を連れ、障がい者と交流を図る船旅に参加した体験を書いた「ひまわり号隠岐へ行く」を挟み、「絵本を読む」を連載した。担任した子どもたちや我が子に読み聞かせてやって喜んだものなどが主だ。そこに、夕焼け通信を秋鹿で広めて下さった公民館の職員さんに紹介してもらったのもいくつか登場している。もちろん、それらの絵本はすぐに手に入れ我が子にも読んで聞かせた。

我が子三人とも赤ちゃんの頃に喜んだのが「いないいないばあ」「くだもの」だ。長女との思い出の絵本はというと、「ぞうのたまごのたまごやき」。作中の詩に勝手に曲をつけ、お腹の中に長男を抱えながら二人手を繋いで歌いながら保育所を行き帰りした。長男は、「きかんしゃやえもん」。まだ字が読めないのに、ページをめくりながら得意げな顔をして大きな声で諳んじていた。二男は「エルマーの冒険」三巻を何度繰り返して読まされたことか。近年、「絵本を読む」で紹介した作家たちが亡くなったという記事を新聞で見るにつけ、心の中にぽつりぽつりと穴が空いていく。

がらがら橋日記

宮森健次

髪①

月に一回の座禅会をするようになって三年が経つ。始めたころはどうしても瞑想とか悟りとか大仰なことを考えてしまっていたが、回を重ねるとそうした特別感もなくなって、ただ呼吸を意識する一時間になっている。そうなるにつれて、あっちこっちに散らかる意識を呼吸へと戻すのが早くなってきたから、座禅にも上達するってことがあるんだ、といいように考えている。気候が穏やかになって、暑さや蚊やらに煩わされることがなくなったからかもしれない、と一応は警戒しているが。

座った後に、J師と参会者でコーヒーを飲みながら語らうのだが、毎回このときに座禅の効果を感じる。だれかと出会って同じ所にいながら一時間も黙していることなど普通はあり得ないが、あえてそうしておいてからおもむろに始まるこの茶話会が、逆に特別感があるのだ。話に特別なものは一切ない。どこにでもある世間話だ。ただ、準備運動をたっぷりしておいてからスポーツするような安心感がある。案外と自分たちの日常は、ウォーミングアップなしにだれかれと出会い、しゃべり、動いているのであって、それがためにつまらぬけがをしていることだってあるのかもしれない、なんてことを思う。

何の話からだったか、僧侶が剃髪するのはなぜかというのをその会で初めて聞いた。お坊さんが頭を剃っていることを、なぜという問いから見てみたことはこれまで一度もなかったので、聞いてなるほどと思った。要するにあんなものは煩いのもとだというのである。髪は装飾だから長短だの形だのと気になる。そんなもん捨ててしまえ、というのが仏教のアナーキーなところでとてもおもしろい。

この時の話が記憶の隅っこに残っていたようで、九月の終わり頃、そろそろ散髪行かないとなと思ったときにふと浮かんできた。そうか、伸びた髪が気にかかるのも、ハゲを隠したくなるのも、煩いの元を所有しているからだ。そう考えたらちょっぴり心も躍って、十月一日の何やらきっぱりとした感じのする日に、行きつけの散髪屋に行った。いつも刈ってくれる男の理髪師が、「短くですか？」とこれまたいつも通りに聞いてくるので、「丸刈りに」と言ったら、「えっ」と言ったまま手を止めた。「なんでまた」と聞き返されるほど気安くはしていないので、後ろで混乱している気配がした。そうして小声で何やら話して、いつもは洗髪やひげ剃りを担当する年配の女性に交代した。本当の実力を秘し、若手に花を持たせて裏方に回っている師匠格がついに重い腰を上げた、といった風情で心の内で笑ってしまった。

ニュース日記　947

中村　礼治

覇権国家の交代はなぜ起きるか

30代フリーター　「米国第一」を掲げるトランプの返り咲きは、他国のことをかまっていられなくなって覇権国家の座からずり落ちた現在のアメリカを象徴している、というのが先週のジイさんの話だった。覇権国家というのはなぜ交代を繰り返すんだ。

年金生活者　資本主義の発展段階の推移がそれを引き起こす。これまで資本主義は商業資本主義、産業資本主義、ポスト産業資本主義（消費資本主義）と推移し、それぞれの段階に適合する覇権国家を誕生させてきた。

　柄谷行人は『帝国の構造』でウォーラーステインの近代世界システム論をもとに、ヘゲモニー国家（覇権国家）の交代の推移を年代を入れて表にしている。それによると、オランダが最初の覇権国家で、それは１７５０年まで続いた。１７５０年から１８１０年までは覇権国家が不在で、そのあと１８１０年から１８７０年まで英国が覇権国家になった。１８７０年から１９３０年まで再び覇権国家の不在が続き、１９３０年から１９９０年まで米国が覇権国家となった。それ以後はまた覇権国家が不在となり、現在に至っている。

　覇権国家が存在する期間も不在の期間も、ともに60年となっている。オランダがいつ覇権国家になったかは記されていないが、60年を当てはめれば１６９０年ということになる。また現在の覇権国家の不在の状態は２０５０年まで続く勘定になる。

30代　それぞれの覇権国家は資本主義の各段階にどう適合したんだ。

年金　オランダは商業資本主義の時代に必要とされた交易のための港湾の整備、東インド会社の設立による商業航路の確立、金融制度の整備などを進めて、覇権国家にのし上がった。イギリスが覇権国家になったのは綿工業などの機械化が進んだ産業資本主義の前期の段階で、原材料や製品の輸送のための運河の建設、道路の改良、鉄道の建設などを進めることで発展を遂げた。

　そして重化学工業が中心となった産業資本主義の後期に覇権国家となったアメリカは、鉄道網、道路網の整備のほか、電力、通信、航空などのインフラ整備を進め、世界の工場になった。

　ひとたび覇権国家になった国は、出来上がったシステムに縛られて新しい段階に適応できない。衰退は避けられず、覇権を後発の国に奪われるほかない。

　現在の消費資本主義はＩＴとＡＩの発展に支えられている。次の覇権国家になるにはその発展を独占的に主導する力が必要となる。今はどの国もそれだけの力を持っていない。それが定まるのは、60年循環を前提にすれば四半世紀あとだろう。

30代　経済力だけでは覇権国家になれないはずで、最後にものを言うのは軍事力だろう。

年金　資本主義の各段階で必要とされる産業インフラの整備を通して経済発展を遂げた覇権国家は、他の国の発展のモデルとなった。しかし、それだけでは覇権を維持することはできない。

　覇権国家と他の国家との関係は、国家と国民の関係と相似形をなす。柄谷行人が国家と国民の間に成立すると考えた交換様式Ｂ＝服従と保護（略取と再分配）が、覇権国家と他の国々との間に成立する。

　覇権国家は、国民に対して税の支払いを強制し（服従、略取）、それで産業インフラを整備した（再分配、保護）ように、他の諸国に対しては、群を抜く経済成長によって手にした圧倒的な軍事力を使って言うことを聞かせ（服従、略取）、代わりに経済活動を妨害する者から守った（保護、再分配）。

　敗戦後、アメリカに軍事的に従属することで、できるだけ軍備に税金を使わず、そのぶんを産業インフラの整備に使った日本の姿にその典型を見ることができる。日米同盟はその産業インフラの土台をなすインフラということができる。

　アメリカが覇権国家の座を降りざるを得なくなったのは、日本の高度経済成長やその後の中国の経済大国化にともなって、産業資本主義の後期の牽引車たり得なくなったことと、各国の産業インフラを支えるインフラである圧倒的な軍事力を維持できなくなったことによる。

30代　覇権国家と他の国家との関係が国家と国民の関係と相似形をなすとすれば、覇権国家が不在の時代はどうなるんだ。

年金　覇権国家と他の諸国家との大規模な交換は、国家と国民の間の交換に置き直して考えると、国民や企業から税金をたくさん取る代わりに、国民や企業へのサービスもたくさんする大きな政府の振る舞い方に相当する。同盟国に米軍基地を置く代わりに、核の傘を頂点とした安全保障のシステムを提供し、世界の警察官として振る舞っていた時代のアメリカを思い浮かべればイメージしやすい。世界をひとつの国家になぞらえると、覇権国家が存在する時代は大きな政府の時代であり、それが不在の時代は小さな政府の時代とみなすことができる。アメリカを後者の時代に見合った規模に縮小しようとしているのがトランプだ。

　小さな政府は交換の規模を縮小して経済への介入を小さくし、富の分配を市場での競争にゆだねる。アメリカだけでなく、各国が「自国第一」への傾斜を強めているのは、小さな政府のもとでの競争の激化と相似形をなしている。